

プログラム・ノート

八木宏之(坂本日菜作品を除く)

「国王陛下万歳」は1745年以降、イギリス国歌として英国およびイギリス連邦諸国(旧大英帝国領)で歌われてきた。作者について、詳しいことは明らかになっていない。「神よ国王を守り給え(God Save the King)」のタイトルでも知られ、英国王に神の加護があるよう祈りながら、その栄光を讃える内容となっている。女王在位中はタイトルと歌詞が変更され、「女王陛下万歳」または「神よ女王を守り給え(God Save the Queen)」となる。エリザベス2世の70年にわたる在位中は、こちらの歌詞で歌われた。英国の文化と精神を象徴するかのよう、その旋律は厳かで気品溢れるものである。

『終わらない夜』はロブ・ゴンサルヴェス(1959～2017/カナダの画家)による16枚のシュールレアリスム絵画に寄せたオルガン作品集。それは闇夜に繰り広げられるさまざまな空想の物語。さあ、音楽が始まったら目をつぶって想像してください……夜、人知れずヴィクトリア駅を発車するエレガントな蒸気機関車、マザーグースのような少し奇妙な子守歌、ローラーコースターのように速度が増していくスコティッシュダンス、そしてシェトランドの赤いオーロラ……。

(坂本日菜)

アイルランド出身の作曲家、ビル・ウィーラン(1950～)の代表作、『リバーダンス』は、1994年にダブリンで開催されたユーロビジョン・ソング・コンテストの幕間の出し物のために書かれた音楽である。アイルランドに伝わるアイリッシュ・ステップダンスにケルトの歌が加わった7分間の総合パフォーマンスはテレビ放送され、世界各国で大きな反響を呼んだ。その後『リバーダンス』は、スペインのフラメンコやロシアのバレエの要素も加わった2幕からなる劇場作品へと拡大した。「ファイヤーダンス」は、フラメンコ・ダンサーが官能的にステージを舞う第1幕の見せ場のひとつである。

「ロンドンデリーの歌」は、アイルランド民謡のなかでも特によく知られているもので、今までさまざまな歌詞がつけられ世界中で親しまれてきた。タイトルの「ロンドンデリーの歌」は、19世紀にこの曲が採譜された北アイルランドの都市に由来する。哀愁に満ちた旋律は多くの詩人たちを刺激し、とりわけ1913年にフレデリック・ウェザリー(1848～1929)によって発表された「ダニーボーイ」は傑作として名高い。讃美歌としても世界各国のプロテスタント教会で広く歌われている。

スコットランドの第2国歌とも言われる『ハイランド・カテドラル』は、意外なことにふたりのドイツ人、ミハエル・コープ（1957～）とウルリヒ・ルーファー（1938～1997）によって作曲された。もともとは1982年にドイツで開催されたハイランド・ゲームズ（スコットランドの文化やスポーツに関する競技会）のために書かれたバグパイプ曲で、のちにスコットランドを讃える愛国的な歌詞がつけられて親しまれるようになった。

ウィル・トッド（1970～）はクラシック音楽とジャズ、ふたつの領域で幅広く活躍するイギリス、ダラム生まれの作曲家である。エリザベス2世の即位60周年（ダイヤモンド・ジュビリー）を記念して2012年に作曲された「コール・オブ・ウィスダム」は、旧約聖書の「箴言」第8章に基づく作品で、金や宝石に象徴される豊かさよりも、知恵や洞察の大切さを説いている。

ジョン・ラター（1945～）は戦後のイギリスの合唱音楽を牽引し続けてきた作曲家である。ケンブリッジ大学クレア・カレッジで音楽を学んだラターは、卒業後もケンブリッジに留まり、大学合唱団の指導者として活動した。1981年には、ケンブリッジ大学の卒業生を中心に声楽アンサンブル「ケンブリッジ・シンガーズ」を結成。録音にも積極的に取り組み、ラターの名は国際的に知られるようになった。

混声合唱と金管アンサンブル、打楽器、オルガンのための『グローリア』はラター初期の代表作で、アメリカ・ネブラスカ州の合唱指揮者、メル・オルソン（1930～2001）の委嘱により、1974年に作曲された（オーケストラ伴奏版も作られた）。作品は「アレグロ・ヴィヴァーチェ／いと高きところには栄光、神にあれ（Gloria in excelsis Deo）」「アンダンテ／主なる神（Domine Deus）」「ヴィヴァーチェ・エ・リトミコ／主のみ聖なり（Quoniam tu solus sanctus）」の3曲からなり、ミサ典礼文（通常文）の「グローリア」に基づいている。

「アレグロ・ヴィヴァーチェ」は4本のトランペット、3本のトロンボーン、そしてテューバで構成される金管アンサンブルの輝かしいファンファーレで開始され、ティンパニの力強いリズムに乗って、合唱がエネルギーに神の栄光を讃える。「アンダンテ」に入ると音楽は一転して静謐なものとなる。オルガンのオスティナートに導かれて合唱が神への祈りを捧げると、天から降り注ぐようなソプラノのソロも聴こえてくる。「ヴィヴァーチェ・エ・リトミコ」はラターの対位法書法が光るフィナーレで、畳み掛けるような「アーメン」が強く印象に残る。最後は作品冒頭のファンファーレが回帰し、華々しく全曲を閉じる。

（やぎ ひろゆき・音楽評論）